学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	庄司　宏子【論文博士】 【比較文化学専攻　昭和62年度生】 （平成2年3月31日　単位修得退学）	本論文は、18世紀末の建国期から19世紀にかけてアメリカの文学や文化のさまざまな局面に、分身や鏡像、双子など、二つのものが反転あるいは転倒した関係をもちながら〈一対〉となった形象で反復強迫的に現れることに注目し、その想像力が、15世紀以降19世紀初頭まで続いたヨーロッパによる植民地支配の歴史と、その記憶を揺曳させる〈アメリカス〉から生み出されるものであることを考察したものである。 第Ⅰ部はで、建国期のアメリカ合衆国が、奴隷暴動を経て世界初の黒人共和国となったハイチを念頭に「大陸の白人国家」として自己形成する様子を、C・B・ブラウンやL・サンセイの小説、マルティニクのM・ド・サン＝メリーの人種の分類の記述に追い、〈アメリカス〉で形成される人種の概念とヒエラルキー構造、サン＝ドマングのクレオール社会と建国期アメリカとの地政学的な繋がりを考察する。 第Ⅱ部では、カリブ海地域を経由してアメリカに浸透するメスメリズムがアンテベラム期のアメリカのセンチメンタリズムの文化に影響した痕跡を〈シンパシー〉をキーワードに分析し、他者への共感という感情が、他者支配的なシンパシーへと反転する様をナサニエル・ホーソーンの実人生とその文学の中に検証する。 第Ⅲ部では、19世紀半ばから始まるアメリカとカリブ海地域、特にキューバとの政治・経済・文化的関係の強化の中で登場するキューバ旅行記や小説に、キューバをアングロ・アメリカとは異なる、カトリックで堕落した「オフ・ホワイト」な他者として創出しつつ、自己を優位に定位するアメリカの姿を考察し、アメリカの拡張主義や帝国主義と、旅行記など文学テクストとの共振を論じる。 終章は、アメリカスの文学的想像力である〈ダブル〉を、H・K・バーバの「模倣」の理論とポスト植民地主義の文脈に考察するもので、ジョスリン・ガードナーのトプシー・ターヴィー人形を用いた現代美術展示を例に、旧植民地出身者による〈南〉のカリブの視点から奴隷制度と植民地主義の歴史を問い直し、アメリカの差異としてではなく、〈クレオール〉としてカリブの主体構築をしようとする、21世紀のアメリカスで展開されるポストコロニアリズム批評意識からの芸術的な実践を論じる。 ポストコロニアリズムの批評理論に依拠しつつ、19世紀アメリカ文学に出現したさまざまなダブルの形象を、奴隷制度と植民地主義の暴力、およびそれらの記憶を共有する〈アメリカス〉の文脈で捉え、その地政学的空間で繰り広げられてきたアメリカとカリブとの歴史的、文化的交渉を前景化させつつ、両者が明暗の反転した〈一対〉として繋がる関係を考察し、そこにハイブリッドな文化的混淆体として、また文学・文化研究の領域として現前する〈アメリカス〉についての論考である。
論 文 題 目	アメリカスの文学的想像力：カリブからアメリカへ	
審 査 委 員	（主査）　教授　戸谷　陽子	
	准教授　清水　徹郎	
	准教授　高桑　晴子	
	教授　松崎　毅	
	教授　天野　知香	